

## 比較文化論 2016後期

(2)  
文化／文化の中の言語とは

1

## 前回の補足 類型とは

- “類型”: 言語に見られる一定の規則性・傾向性に応じた分類
- 言語の普遍性と多様性
  - 言語の構造: ソシユール
  - チョムスキー: 普遍文法 Universal Grammar: “言語機能”  
生成文法: 「原理」と「パラメータ」

言語**普遍**の規則: (形態→)語→句(→節)→文  
× パラメータ(+言語**個別**の規則)  
= **個別言語**

- パラメータの例)
  - 主要部: 右側(VO言語)／左側(OV言語)
  - Zero代名詞: 有り(日本語・イタリア語・スペイン語...)  
無し(英語、フランス語...)
  - 疑問移動: 有り(英語...)／無し(日本語...)

2

## 前回の補足 類型とは

- “類型”: 言語に見られる一定の規則性・傾向性に応じた分類

**絶対的普遍性** → **普遍言語**

すべての言語は

- 子音と母音を持つ
- 名詞と動詞の区分をする
- 疑問を表す手段をもつ .....etc.

**非絶対的普遍性** → **持たない場合、言語固有の特徴**

ほとんどの言語は

- [i]という母音を持つ
- 形容詞を持つ
- yes/no疑問文で上昇調イントネーションを持つ  
.....etc.

**含意的普遍性** → **類型(を分ける決め手としてのパラメータ)**

偶然を遙かに超える頻度で

- OV言語は後置詞を持つ
- VO言語は前置詞を持つ  
.....etc.

3

## 言語の系統関係「語族」

(例) インドヨーロッパ語族の系統樹

瀬田幸人ほか編『入門』ことばの世界』大修館書店, p.13より<sup>4</sup>

## 類型と系統／地理

- 系統: 語族
  - 言語連合
  - 共通の起源をもつ言語のまとめり
  - 地理的な近接性ゆえに文法上の特徴を共有する言語のまとめり
- 例)
- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>- インドヨーロッパ語族</li> <li>- アフロ・アジア語族</li> <li>- 満州・ツングース語族</li> <li>- ...</li> </ul> <p style="text-align: right;">(日本語は孤立)</p> | <p>例) バルカン半島諸言語<br/>(アルバニア語、ブルガリア語、ルーマニア語)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• インドヨーロッパ語族ながら<br/>定性を名詞の接尾辞で示す</li> <li>• アルバニア語: mik-u(人-その)</li> <li>• ブルガリア語: trup-at(身体-その)</li> <li>• ルーマニア語: om-ul(男-その)</li> </ul> |
|---|---|

5

## 言語決定論と相対論

- サピア・ウオーフの仮説:
- 人間の思考・認知過程と、その文化の型は、母語の型によって相対的に区別され大きく影響を受ける(相対論)／大幅に決定される(決定論)。
  - 人間は、それぞれの社会において表現の媒体となっている特定の言語に多分に左右されている。.....「現実の世界」は、実はその大部分が、当該集団の言語慣習を土台として無意識のうちに構築されているものである。(Sapir1921/1949)
  - 言語とは、思考の特定の「方式」である。(同)
  - われわれは母語によって規定された線に沿って自然の切り分け。われわれは現象世界の中にもろもろの範疇や類型を見て取るが、これはなにも、それらの範疇や類型が、もともといかにも目に付きやすいかたちで外界に存在しているからではない。むしろ外界は走馬燈さながらに錯綜した印象の束として呈示されており、その組織化はわれわれの頭の動きにゆだねられている。そしてこれは、とりもおおさず、組織化が多分にわれわれの頭の中にある言語体系に即して行われていることを意味する。(Whorf1956)
  - 言語の音韻・形態・統語の型が創出する意味の形式には無制限に近い可変性がある。個々の言語によって符号化されている意味の網の目には先験的な制約は一つもなく、ある言語で符号化されている区別立ての総体は、他のいかなる言語のそれとも異なる。特定の言語の型とそれを母語とする人々の認知と文化の型は、密接な対応関係にあり、前者の後者に対する影響のほうが(略)はるかに大きい。  
(光延明洋「言語相対論」(宮岡伯人編1996『言語人類学を学ぶ人のために』p.203) 6)

## 認知の独立／言語の非恣意性

- 色の知覚
  - 白-黒 > 赤 > 緑 > 黄 > 青 > 茶
    - 古代日本語: しろ・くろ・あか・あお
    - 黄=木の色、茶=茶の色...
- 類象性
  - 複数性・反復表現
  - オノマトペ(擬音語・擬態語)

7

## “文化”の中の“言語”

### 【文化とは】

#### (一例) 宮岡2015(『「語」とは何か再考』三省堂)の見解

- 環境との相互作用の中で生み出されてきた適応戦略、いわば一種のクッションこそが文化だとするのが文化にたいするひとつの見方であろう。(宮岡2015:22)
- 言語は、文化の下位システムでありながら、文化の全体と細部をもれなく包みこんだ一種のカプセルとみることができる。(宮岡2015:35-36)

8

## “文化”と“言語”

文化の基本的なしくみ(宮岡2015: 24より)

9

## “文化”の中の“言語”

- 言語1: 認識と思考の言語
  - 環境を分け範疇化する: 語彙的範疇化・文法的範疇化
- 言語2: 伝達の言語
  - 間接機能的なコミュニケーションツール
  - 社会の中の「コード」(記号)
- 言語3: 直接機能性の言語
  - 言霊、呪文、言語芸術、社会化(帰属意識)、
  - 翻訳不可語

10

## “文化”の中の“言語”

- 言語1: 認識と思考の言語 → **一定の普遍性**
  - 環境を分け範疇化する: 語彙的範疇化・文法的範疇化
  - **“無限”の多様性**
- 言語2: 伝達の言語
  - 間接機能的なコミュニケーションツール
  - 社会の中の「コード」(記号)
  - **変化を嫌う(小さな言語の消滅)**
  - **メディア等の発達による影響・変化**
- 言語3: 直接機能性の言語
  - 言霊、呪文、言語芸術、社会化(帰属意識)、
  - 翻訳不可語
  - **多様性、言語固有性**

11

## 語彙的範疇化

- 色彩語彙
- 親族名称
- 動植物名
- 成長魚の名前

.....線引きの違い = 当の文化の個性

- 山田幸宏1996『ことばの民族誌』高知新聞社

12

## 文法的範疇化

- 名詞の性(男性・女性・中性 etc.)
- 数(複数、単数、.../接辞付加・重複...)(類別詞)
- 格
- 文法範疇
  - テンス(時制)
  - アスペクト(完了・非完了)
  - ヴォイス(受け身、使役、etc.)
  - モダリティ(推定、推量、証拠性、etc.)
- 品詞
  - 動詞型/名詞型 「石が 落ちる(文)」「石る-シタへ(語)」
- 形態・統語論
  - 「船に 人が 4人 乗っている。」(日本語)
  - 「四る-ヒト 冠詞=乗っているもの に=冠詞=船」(アフリカ北西海岸スライアモン語)  
(宮岡2015:27-33)

13

## “文化”の中の言語の多様性

- 環境
  - 地理(空間)
  - 歴史(時間)
  - 社会(コミュニティ)
- 伝達
  - 伝達目的(知識(論理・情報)、体験、芸術...  
/行為指示、感情表出、親交、娯楽...)
  - 伝達媒体(音声、文字、メディア...)
  - 伝達条件(共在/非共在、個別/不特定多数...)
- (狭義)文化の固有性

14